

# 60年前の私の8月15日

国立長寿医療センター研究所特別客員研究員 木谷 健一



## ■木谷 健一〈プロフィール〉

昭和10年生まれ。昭和35年東京大学医学部卒。同第2内科。東京都老人総合研究所、東京大学医学部教授(放射線研究施設長)を経て平成7年国立長寿医療研究センター初代センター長。同13年退官。専門、肝臓生理学、老年学。囲碁九段木谷実の長男

今年も又8月15日が巡ってくる。60年前のこの日、小学校4年生の私は山中湖畔の疎開先で両親と6人の姉弟と一緒に天皇陛下の声をラジオで聞いた。勿論その意味は何も分からなかった。小学校(当時は国民学校)1、2年生で吉川英治の宮本武蔵を読みふけていた些かませた私も世の中の事には疎かった。2年生の3月、“今日は何の日ですか?”との先生の問いに、同級生の綾部剛君が“陸軍記念日”と答え、さらに“今日の観兵式はどこで行われるのですか?”の問いに“代々木の練兵揚”とかん高い声で答えたのには、あっけに取られ仰天したものだ。3年生の或る日やはり同級生の登志田忠男君が、朝学校で顔をあわせるなり真剣な顔で“サイパン島の兵隊さんみんな死んじゃった”と私に言った時もそれが何を意味するのか殆ど分からなかった。唯だ登志田君の丸い大きな目と真剣そのものの顔を見た時“これは大変な事なのだろう”と思った。その後、多分アッツ島の玉砕の後だったのだろう。雨の日、階段の下に集められた私達3年生は、体操の先生から“皮を斬らせて肉を斬り肉を斬らして骨迄ぶっ斬っちゃう”と大きな怒鳴り声の話を聞かされた。しかし終戦後、この学校の校長先生だった先生が市会議員に立候補しこの同じ体操の先生が自転車走らせながら候補者の名前を同じ大声で連呼しているのを聞いた時、同じ先生の“骨迄”の声を思い出しどうにも納得がいかなかった事を覚えている。私達は既に選挙は民主主義の根本と教えられていたのである。

大学の同学年生に大江健三郎氏が居る。氏が“終戦前後で学校の同じ先生の言う事が全く変わった”と繰り返し物にも書き又話して居られる事に大いに共鳴し声無き声援を送って来た。しかし最近の氏の文章から“60年前10歳の時の事を憶えて居る筈が無い。後からのデッチあげたに違い無い”との大江バッシングが起こっていることを知った。同い年の私の原体験から精一杯の声援を氏に送りたい心境で在る。私のみならず、大学、医局を共にした同い年の親友村山正博君(聖マリアンナ医大前学長)も半生の回顧の文の中で全く同様の事を書いている。

同年10月、焼け野原の平塚に帰った我々親子は人並みの戦後の苦労を重ねた。バラックの3畳に親子6人で寝た日々、アイオン台風でバラック建ての家(戦災復興住宅、通称配給の家)の屋根がすっぽりと飛んで行き、翌朝あおおとした空を家の中から眺めた日。空き腹を抱えての山羊の餌の草刈りや生垣のまさき刈りの毎日。小麦、さつまいもを始め稲以外の全ての野菜を作った畑仕事。小学校4年から中学3年までの私の記憶は2歳年下の弟と一緒に毎日の草刈りと母の後ろに付いて耕した畑の記憶でほぼ全てだ。半生をかけて築いたものを全て失った両親に比べ私自身は家を失った事のダメージは不思議な程無かった。むしろ“これだけ多くの戦災仲間の中でもし家が焼け残っていたらどんなに肩身の狭い

思いをしたか”とほっとしたような気がしたので憶えている。サイパン、沖縄の地獄にも、勿論原爆にも遭わず、7月14日の平塚の大空襲にすら

出会わず、突然の空襲警報の直ぐ後に起こった機銃掃射と高射砲の激しい打ち合いの中防空壕に飛び込んだら、まん中の妹が縁側に取り残され泣叫んでいた空襲を唯一の恐怖体験として終わった私の戦争体験。ひもじく、苦しい中にも親子が1人も欠けずに過ごせた戦後。私と私の家族は当時の日本人のなかで一番幸せな日本人に属している。

3ヶ月の教育召集で散々に殴られて帰って来た父が戦後焼け跡の畑で“囲碁を通じて世界平和を”と1人小さく繰り返し呟いていたのを良く覚えている。一昨年母の故郷に作られた“新布石発祥の地”の碑の除幕式で呉清源九段にお目にかかった。同九段は父の最大の好敵手で且つ親友であったが謝辞で、奇しくも国際平和に対する囲碁の役割を強調されていた。戦前から台湾、日本、中国の間で国際間の苦労を重ねて来られた同九段の言葉は重い。と同時に、平和が無ければ囲碁の発展の何も無い。戦争からは無事で帰った父ではあったが、碁打ちが碁を打って食べるなどできない時代に、姉弟7人となった一家を死にものぐるいで支えてきた戦後は過酷にすぎたのかも知れない。昭和29年私の大学入試の2週間前45歳の父は突然私の目の前で高血圧で倒れた。その後カムバックしてタイトルも取ったが戦後の父の碁打ちとしての半生は、本人にとっては思いもよらぬ本意なものだっただろう。対照的に呉九段は戦後日本人の全てのトッププロとの10番碁を勝ち抜いた。はからずも私の半生の仕事となつた“老年学”では、心身共に活動的、生産的な高齢者を“サクセスフルエイジング”と呼びその実現を最終の目的としている。一昨年18年振りにお目にかかった当時89歳の呉九段が“私は100歳までがんばります。そのため毎日一生懸命勉強しています。しかしあと11年しかない。時間が無い。時間が足りない。”と真剣な顔で話された時、私どもが追い求める理想の“サクセスフルエイジング”の一つの顔を見たと思った。戦前、相協力して“新布石”を華々しく唱えた2人の戦後はあまりにも違う。仕事として“サクセスフルエイジング”を追い求め、人様の前で話す立場となった私ではあるが、父の往った年令を3年超えた今、他人事では無くなった。身近かなこの2人の対照的な後半生は今の私の胸にずしりと重い。